

台湾国立交通大学理学院との 学術交流協定の締結

瀧口 宏夫 (化学専攻 教授)

台湾国立交通大学理学院と理学系研究科の間に学術交流協定が締結され、李遠鵬 (Y.-P. Lee) 理学院院长と岩澤康裕研究科長 (当時) が覚書に署名した (2007年3月7日、写真)。交通大学は、台湾の新竹市 (台北の南西 50 km) にあり、国立台湾大学、国立精華大学とともに同国有数の大学として知られている。中央に大きな湖を有する広大なキャンパスの中に、理学部、工学部など 11 学部を配置した、学生数約 29,000 人、

研究者数約 2,800 人の総合大学である。

学術交流の第一歩として、交通大学理学院分子科学研究所李教授と化学専攻瀧口 (2月1日付けで交通大学講座教授に就任) が共同で、「極限分光イメージングセンター (Ultimate Spectroscopy and Imaging Center)」を交通大学に設立する計画が進んでいる。この計画は、台湾および日本をはじめ、アジアを中心とする世界各国から研究者、学生を集め、分子分光光学に関する国際的研究教育センターを形成することを目標としている。分子から細胞まで、さまざまな分子系を対象とした幅広い分野での研究、教育の展開を目指している。センターの学生、教員が、東京と新竹を自由に往復

し、2箇所で開催された最先端の分光装置を最大限利用して研究を進めることができるように、予算措置を含めたさまざまな仕組みが整えられている。



図：署名した覚書を交換する李院長 (右) と岩澤研究科長 (左、当時)。中央は筆者。

第11回東京大学理学部 公開講演会、開催される

半田 利弘
(附属天文学教育研究センター 助教)

東京大学大学院理学系研究科・理学部主催の公開講演会が、4月20日 (金) 18時より駒場キャンパス数理学研究科大講堂にて開催された。「挑戦する理学～自然の謎に迫る～」と題して、理学研究の進展は現在も続いていることを学生や学外の人々にアピールする企画とした。

山形俊男副研究科長による挨拶に続き、

江口徹教授 (京都大学基礎物理学研究所長/本学物理学専攻) による「アインシュタインの夢と超弦理論」、程久美子准教授 (生物化学専攻) による「生命の神秘に迫る RNA」、山内薫教授 (化学専攻) による「光の場の中の分子」の 3 講演が行われた。

関心が高いながら誤解も多い相対論的量子論、遺伝情報や生命起源に関連した RNA 研究、強光場下の 10^{15} 秒での化学変化など興味尽きない話題について、基礎となる概念から最新の研究状況に至るまでが、35分という短時間でわかりやすく紹介された。

好天に恵まれ開演 20 分前にはほぼ満席、

用意していた学内 TV 聴講席も満席となり、さらに多数の来場者が続いたため、急遽、ホワイエのモニター前に席を増設して対応した。定員 240 名のところ来場者数は 469 名を数え、理学研究に対する一般の関心の高さを示すこととなる一方で、会場の見直しも視野に入れて検討するの必要を感じた。講演内容はインターネットによる学外中継も行われ 437 ヲ所からのアクセスが記録されている。

次回は、秋に本郷キャンパスにて開催予定である。



図 1：満員御礼でぎっしりと埋まった大講堂。この後ろには多数の立席客も発生した。



図 2：隣接した教室に用意した TV 聴講室。こちらも満席となった。

理学部・理学系研究科奨励賞 ／総長賞受賞おめでとう

■ 松浦 充宏 (地球惑星科学専攻 教授)

2006年度から総長賞に学業部門枠が新設されたのを機に、理学部・理学系研究科でも、学業・研究の励みとなるよう、学部生を対象とした理学部学修奨励賞と大学院生を対象とした理学系研究科研究奨励賞を設けることとなった。初めての試みなので、各学科・専攻から奨励賞の対象となる学業・研究に優れた学生41名(別表)を選抜してもらい、その中から生物学科4年の池内桃子さん、物理学専攻修士課程2年の竹内一将君、同博士課程3年の西田祐介君を総長賞候補者として推薦した。

奨励賞の授賞式は、2007年3月22日(木)午後1時

から理学部1号館2階会議室で行われ、受賞者には岩澤康裕研究科長(当時)から表彰状が手渡された。理学部・理学系研究科が推薦した池内さんは見事に総長賞を受賞、また竹内君も、その修士課程での研究が高く評価され、総長特別賞を受賞した(写真)。総長賞の授賞式は、同日午後5時から小柴ホールで行われた。理学部・理学系研究科奨励賞並びに総長賞の受賞者に改めて拍手を送りたい。



図：授与式(3月22日)において総長が表彰状を直接、受賞者に手渡した。

研究奨励賞受賞者(博士)

物理学専攻	西田 祐介
	日下 暁人
	和達 大樹
	酒井 志朗
天文学専攻	松永 典之
地球惑星科学専攻	柏山祐一郎
	大石 裕介
	森野 悠
化学専攻	長坂 将成
	一杉 太郎
生物化学専攻	今井 猛
	張ヶ谷有里子
生物科学専攻	遠藤 大輔
	五條堀 淳

研究奨励賞受賞者(修士)

物理学専攻	竹内 一将
	榎戸 輝揚
	青木 孝道
	川崎 真介
天文学専攻	田中 雅臣
地球惑星科学専攻	風間 卓仁
	池田 恒平
	池田 陽平
化学専攻	島田林太郎
	藤野 智子
生物化学専攻	佐々木 浩
生物科学専攻	石松 愛
	加村啓一郎

学修奨励賞受賞者

数学科	伊藤 敦
	佐々田慎子
情報科学科	小島 晃司
物理学科	高吉慎太郎
	中村 栄太
	森本 高裕
天文学科	児島 和彦
地球惑星物理学科	川上 悦子
化学科	武永 真也
	飯塚 理子
生物化学科	稲垣 秀彦
生物学科	池内 桃子
	安岡 有理
地学科	金井 健

■ 表：理学部・理学系研究科での奨励賞受賞者一覧

附属臨海実験所設立 120周年 記念シンポジウム

■ 赤坂 甲治 (附属臨海実験所 教授)

明治20年(1887年)4月1日、帝国大学臨海実験所として発足した理学系研究科附属臨海実験所(通称三崎臨海実験所)は、この4月に120周年を迎えた。大日本帝国憲法制定の3年前、富国強兵を目指していた明治時代に、海産動物学という基礎学問を、世界に先駆けて日本で始めた東京大学の先人たちの先見の明に驚かされる。

120周年を節目として、2007年4月7日(土)に今後の三崎臨海実験所のあり方を議論するシンポジウムが開催された。文部科学省から来賓を迎え、本学からは岡村副学長、山本研究科長らが出席し、関連各学会の会長を交えて活発な議論が展開さ

れた。三崎臨海実験所が面する相模湾は、世界的にも稀な豊かな生物相を誇り、多様な海洋生物を活かした研究業績は高く評価されてきた。また、本学の他部局や他大学、国外からも利用があり、年間延べ1万人を超える研究者・学生が活動している。

今回のシンポジウムの議論の中心は、その規模にあった。利用人数に比べスタッフが少なく職務の負担が重いこと、国内では質・規模とも他の追随を許さないが、欧米に比べると圧倒的に規模が小さいことである。欧米では、海洋生物から医学・工学にも応用されるノーベ

ル賞級の研究が多数生まれていることが理解され、国を挙げて海洋生命科学を支援している。海洋生物学の最前線基地である臨海実験所の将来像を、東京大学のみならず、日本学術会議、関連学会においても議論していく必要があるとの認識で一致し、閉会した。



図：所内見学での2005年に再建された木造和船「みさき」の試乗。正面向きの方、右より岡村定矩理事・副学長、関藤守技術職員(船頭)、山本正幸研究科長。